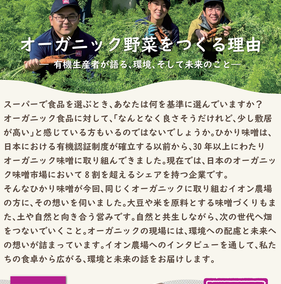
HIKARI MISO × AEON 農場 イオンアグリ創造



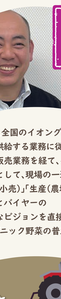
オーガニック野菜をつくる理由

―有機生産者が語る、環境、そして未来のこと―

スーパーで食品を選ぶとき、あなたは何を基準に選んでいますか？オーガニック食品に対して、「なんとなく良さそうだけれど、少し敷居が高い」と感じている方もいるのではないでしょうか。ひかり味噌は、日本における有機認証制度が確立する以前から、30年以上にわたりオーガニック味噌に取り組んでまえました。現在では、日本のオーガニック味噌市場において8割を超えるシェアを持つ企業です。

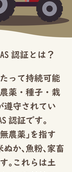
そんなひかり味噌が今回、同じくオーガニックに取り組むイオン農場の方に、その想いを伺いました。大豆や米を原料とする味噌づくりをまた、土や自然と向き合う営みです。自然と共生しながら、次の世代へ繋をつないでいくことを、オーガニックの現場には、環境への配慮と未来への想いが詰まっています。イオン農場へのインタビューを通して、私たちの食卓から広がる、環境と未来の話をお届けします。

イオン農場 鵜飼邦明氏にお話を伺いました



現在は関西を拠点に、全国のイオングループ店舗へオーガニック野菜を供給する業務に従事しております。イオングループ入社後、店舗での青果販売業務を経て、イオンアグリ創造株式会社へ転籍。直営農場での農場長として、現場の一連の農業経営に携わりました。現在は、これまでの「販売（小売）」「生産（農場）」「供給（物流・バイヤー）」の各視点を活かし、生産者とバイヤーの架け橋となるべく、課題解決や将来的なビジョンを直接話し合い、持続可能な農業の発展と高付加価値なオーガニック野菜の普及に日々注力しております。

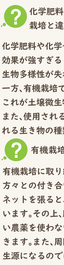
有機野菜づくりの現場と、本当の大変さ

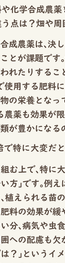


Q 有機栽培とはどういったご栽培ですか？有機 JAS 認証とは？

有機栽培とは、環境負荷を低減することで、未来にわたって持続可能な生産を目指す栽培方法です。その実践には、肥料・農薬・種子・栽培手法などに厳格な基準が設けられており、これらが違守されているかを第三者機関が審査・証明する仕組みが有機 JAS 認証です。よく誤解されますが、有機栽培は必ずしも「無肥料・無農薬」を指すわけではありません。まず肥料については、油かす、米ぬか、魚粉、家畜の糞尿といった動植物由来の「有機肥料」を使用します。これらは土壌中の微生物によって分解されることで栄養となるため、即効性は低いものの、穏やかに長期間効果が持続するのが特徴です。

また農薬に関しても、有機 JAS 規格で認められたものであれば使用可能です。これらは化学合成されたものではなく、自然界由来の成分で構成されており、一般的に残留性が低く、効果も限定的なものが中心です。環境への負荷を抑え、自然の循環と調和することで、それこそが有機栽培の本質といえます。





Q 化学肥料や化学合成農薬を使わないことで、慣行（ふつうの）栽培と違う点は？畑や周囲に起きた変化は？

化学肥料や化学合成農薬は、決して悪影響ばかりではありませんが、効果が強すぎることが課題です。使い続けることで土壌が痩せたり、生物多様性が失われたりすることがあります。

一方、有機栽培で使用する肥料には多くの有機物が含まれており、これが土壌微生物の栄養となって豊かな土を作ります。

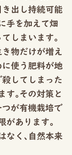
また、使用される農薬も効果が穏やかなものが多いため、田畑に見られる生物の種類が豊かになるのも特徴です。

Q 有機栽培で特に大変だと感じるのはどんな点ですか？

有機栽培に取り組む上で、特に大変なのが「収穫量の確保」と「近隣の方々との付き合い方」です。例えばキャベツの場合、虫を防ぐためのネットを張ると、結構手間がかかるうえに、虫が来ずに売り物にならないものも出てきます。また、周囲への配慮も欠かせません。「有機の陽は病害虫の発生源になるのでは？」というイメージを持たれることがあり、実際に虫の移動が問題になるケースもあります。一方で、隣の畑からの農薬飛散に気を掩さこと少なくありません。

自らの工夫で解決できること、そして自分一人ではどうにもできないこと。有機栽培は、こうした複雑な課題と向き合い続ける根気が必要です。

「持続可能な農業」とは



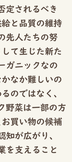
Q 「環境にやさしい農業」とはどういうことか

「環境にやさしい農業」とは化学肥料や農薬の使用を低減し、土壌、水質、生態系への負荷を抑えながら自然が持つカを引き出し持続可能な形で食料を生産する農業を指します。農業は、自然に手を加えて「加工」をすることで、どうしても多様性の少ない環境を作ってしまいます。作物を育てることで土の栄養が失われたり、特定の虫を物だけが増えすぎたりすることもあります。それらを解決するために使う肥料が地下水へ流れ込んだり、農薬が本来守るべき生き物まで殺してしまったりすることが、現在、深刻な問題として捉えられています。その対策として「環境にやさしい農業」が求められており、その一つが有機栽培です。有機栽培では、使用できる肥料や農薬に厳格な制限があります。化学肥料や化学合成農薬で強制的に成長を促すのではなく、自然本来の力を引き出して育てるのが大きな特徴です。

なかでも、生物多様性の維持と土づくりは非常に重要です。農薬に頼らないことで、害虫の天敵となる生き物が増え、特定の種が極端に繁殖するのを抑える自然のバランスが保たれます。

また、土は「結晶・有機物・微生物」が複雑に絡み合って作られた、極めて貴重な資源です。一度失われると再生には膨大な時間を要するため、有機栽培ではこの土の豊かさを守り、次世代へつなぐ役割も担っています。それが調査にみられるのが有機栽培のリムゴです。果物に限らず、有機栽培は非常に国難であることで知られています。日本では果実をより甘く、大きくするための品種改良が盛んですが、その反面、虫害を受けやすく肥料不足にもなりやすい性質があるからです。特に、わずかな食害痕でも商品価値が著しく下がるため、防虫は極めて大きな課題です。こうした中、ある農家は殺虫剤に頼らない手法を実践しています。あえて下草を短く刈りはず、りんごの樹の周囲に複雑な生態系を残すことで、特定の害虫が大量発生するのを防いでいるのです。また、多様な草が生い茂り、やがて枯れて土に還ることで、土壌の状態も改善されています。このように自然のカを最大限に引き出すことで、環境負荷を抑えた持続可能な農業が可能となります。

オーガニックは“特別なもの”ですか？



Q 消費者に、オーガニック野菜をどう取り入れてほしいですか？

まず、慣行農業（オーガニックでない農業）が完全に否定されるべきものではない、という前提があります。食料の安定供給と品質の維持は、人類の悲願である「飢餓の克服」を実現するための先人たちの努力の結晶です。しかし、その効率性を追求した結果として生じた新たな弊害に対し、解決策を提示する取り組みこそがオーガニックなのです。すべての食事をオーガニックに変えるのは、なかなか難しいのが現実です。大切なのは、無理をして一度きりで終わるのではなく、「心地よく続けていくこと」。今はまだ、オーガニック野菜は一部の方向けというイメージが強いかもしれません。しかし、お買い物の機会に少しずつ取り入れてくださる方が増えることで、認知が広がり、結果として日本の豊かな自然を守り、持続可能な農業を支えることにつながります。まずは「今日のみそ汁」から。

オーガニック味噌ご だけのまま。とオーガニック野菜を無理のない範囲で、日々の生活に取り入れてみませんか？

Q 「オーガニックを選ぶこと」は、どんな未来につながると思いますか？

オーガニックを選ぶことは、持続可能な未来への確かな一歩です。日本では自然の復元力が比較的強いため、オーガニックの恩恵はすぐには見えにくいかもしれません。しかし、世界に目を向けると、慣行農業が環境に与える致命的な影響は深刻です。

気候変動、生物多様性の喪失、地域文化の保護、食料の安定供給といった世界規模の大きな問題は、個人ではどうしようもない遠い話のように感じられるかもしれません。

ですが、これらの問題は、私たち一人ひとりの日々の選択と行動が積み重なった結果起こっていることなのです。

日々の暮らしの中でオーガニックを選ぶという小さな選択が、持続性のある、より良い未来へと繋がっていきます。あなたの一歩が、世界を変える力になります。

今日から始めよう、オーガニックのある生活

いつもの野菜や味噌を、少しだけでもオーガニックに変えるだけ、これが地球と未来にやさしい選択につながります。自然と共に明日に向かって歩んでいくために、“オーガニックのある生活”、始めてみませんか？

MY ORGANIC for TOMORROW